20090815/ あろわにあな日々/ 脳神経外科速報

あろわにあ(Arowania)な日々

医療法人社団)涼風会　佐藤脳神経外科　佐藤　透

熱帯魚は、開業して以来のお友達。飼育暦もはや 18 年になる。水槽ｾｯﾄをﾎｰﾑｾﾝﾀｰで買ってきて、玄関靴箱の上に設置したのが、つい先日のことのように思える。最初はｸﾞｯﾋﾟｰやﾈｵﾝﾃﾄﾗ、ｶﾗｼﾝ、ｸﾞﾗｽｷｬｯﾄから飼いはじめた。子供の頃、親父さんの診察室には熱帯魚の水槽があって、青いきらきらとした、めだかっぽい小魚(おそらくﾈｵﾝﾃﾄﾗ)が群れ成し泳いでいた。やはり“かえるの子は蛙”なんだろうか？

それ以来、底物ﾌﾟﾚｺからｼｸﾘｯﾄﾞ、淡水ｴｲ、定番のｽﾎﾟｯﾃｨﾄﾞｶﾞｰまで飼い込んだ。ﾍﾟｱ繁殖にも挑戦した。ｴﾝｾﾞﾙﾌｨｯｼｭやﾃﾞｨｽｶｽの子が孵り、ﾋﾞｰｼｭﾘﾝﾌﾟを与えて育てた。無数の子魚は、青い蛍光灯を浴びて、夜空に輝く星座、天の川のように、水槽の天空を、自由奔放に舞い踊る。

熱帯魚の月刊誌には、ﾌｨｼｭﾏｶﾞｼﾞﾝとｱｸｱﾗｲﾌの 2 誌があり、いずれも愛読書となっている。一歩のめり込んで、ﾏﾆｱｯｸなｱﾛﾜﾅ専門誌には、台湾系鳴美のﾌﾟﾗﾀﾊﾟｯﾄﾞと和製季刊のｱﾛﾜﾆｱがあって、こちらも年間購読者となっている。ｱﾛﾜﾅ養殖業者の現地情報や愛好家の水槽、これぞっていう自慢のｱﾛﾜﾅ写真が満載され、眺めているだけで視界いっぱいの幸福感がやってくる。

そのなかに時折載っているｱﾛﾜﾅ座談会は、気軽に読めて、飼育ﾉｳﾊｳが得られるお気に入り。誌上に登場する、控えめで玄人職人っぽいＲ社のＦさんに好感が持てた。さっそくｲﾝﾀｰﾈｯﾄで検索して、ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞからｼｮｯﾌﾟに電話を入れた。どうやら奥さんとふたりでｼｮｯﾌﾟをはじめたばかり、熱のこもった長話となった。現在、手持ちのｱﾛﾜﾅ在庫はなく、暮れに現地ｲﾝﾄﾞﾈｼｱのﾌｧｰﾑに飛んで、年明け早々に航空便で輸入されるとのこと。

その中には黒々とした真っ赤で紅色に染まる、お目当ての紅龍ﾒﾀﾙ･ﾚｯﾄﾞも届く。14cm ほどの生後数ヶ月の個体で、お値段は？って尋ねると～¥●●万円なりって。ｴｴｯて思ったけど気を取り直して、お安くなりますか？まけられないって、ｵｲｵｲｯ。ほかにお買い得なものはなにかある？ﾃﾞｨﾝﾐｶ･ｶﾌﾟｱｽのﾀﾞｲﾅﾐｯｸ･ｽｰﾊﾟｰ･ﾚｯﾄﾞ、これはその半値だって。背中まで金色の鱗捲く過背金龍、ﾏﾚｰｼｱ･ｺﾞｰﾙﾃﾞﾝはどう？AAA ｸﾗｽなら 15cmもんでその 2 倍のお値段。う～んちょっと待って、よ~く考えてまた電話させて頂戴な。

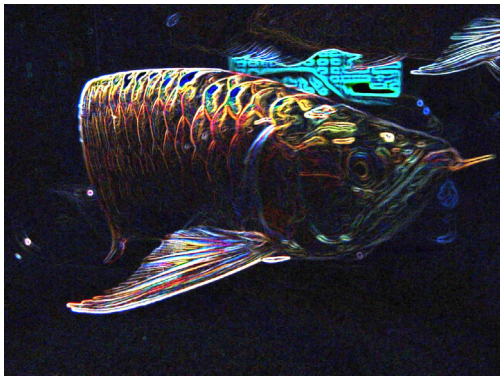
憧れは、真っ赤っ赤の紅龍と金きら金の過背金龍たちが競演する夢のｱﾛﾜﾅ混泳水槽。ｱﾛﾜﾅは縄張りを持つ魚で、2-3 匹ではいずれかが死ぬまで喧嘩する。一匹飼いで飼い込むか、混泳するにはせめて 5-6 匹は欲しいところ。まずは数匹のﾁﾋﾞちゃんｱﾛﾜﾅから混泳させてみたい。

もんもんと思案投げ首していても始まらない。おなじみのｼｮｯﾌﾟにでかけた。それなら、うちでお取寄せしましょうか。ｼｮｯﾌﾟの“おじさん”と仲良しになると業界内部の事情がよく分かる。取引の開始は、直接のお電話から。相手を喰ったようなそれっぽいﾍﾞﾃﾗﾝな話しぶり、面食らったようすの相手方とひと通りのご挨拶。ｼｮｯﾌﾟの確認には店判が必要となる。

CONFIDENTIAL!

お店の名前住所電話番号などが記載されたﾊﾝｺを押してﾌｧｯｸｽする。さっそく卸しの値段の入った在庫ﾘｽﾄが送られてきた。

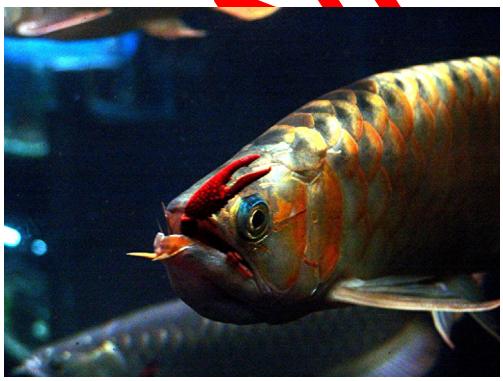
この前聞いた話とえろう違う、いずれも半額ちょいじゃないの。通常、掛値は 2 倍+運賃、ってことはｱﾛﾜﾅの仕入れ値は定価の半値足らずで、業者の買付け元値は微々たるもんじゃな。数ｶ月毎にｲﾝﾄﾞﾈｼｱやﾏﾚｰｼｱのﾌｧｰﾑにでかけて、“日本でﾌﾞﾗﾝﾄﾞつけて販売してやっから”って独占契約をとって、買い叩いて来るんじゃろな。かつては買付けﾙｰﾄが暴力団や国際ﾏﾌｨｱの資金源となっていたけれど、いまは華僑が仲介して、素人さんものこのこ出かけている。近頃は、好景気の中国や香港からのﾊﾞｲﾔｰが多く、いくぶん品薄状態で、買付け値段も上っているらしい。



案外の値段に、なんだか得した気分となった。ｼｮｯﾌﾟ経由で、R 社から若いｱﾛﾜﾅ 7 匹が、掛値なしで届いた。すくすくと順調に生育なされた。少し大きくなると“こだわりの餌”となる。冷凍赤虫は冷凍庫で簡単にｽﾄｯｸ可能だけど、大きく育てるにはちと物足りない。やっぱり生き餌が要るなぁ。即席に大きくﾒﾀﾎﾞに育てるには、ｶｲｺのようなﾐﾙ・ﾜｰﾑがいい。

色の揚がる専用ﾐﾙ・ﾜｰﾑの広告を見つけて、早速東京のｼｮｯﾌﾟに電話した。そりゃぁお客さん赤いｱﾛﾜﾅ飼っておられるんなら、真っ赤に色揚げするんなら、ってくすぐられて、少し割高だけど専用のﾚｯﾄﾞ・ｼﾞｬｲｱﾝﾄ・ﾐﾙ・ﾜｰﾑですよ。さらりと言われて目から鱗がﾎﾟﾛﾘ。真っ赤なﾜｰﾑと思いきや、届いたﾜｰﾑは、どこからどう眺めてもいつものﾜｰﾑと変わらない。“いったいどこがちがうんじゃぃ？”って文句を言ったら、そりゃぁﾜｰﾑに喰わしてるものが違う。ｶﾛﾁﾝ豊富な飼料をたっぷり喰わしてるから、大きくなると色の違いが出てくる、ってはぐらかされた。なるほど食物連鎖はあるやもしらねど～これってﾎﾝﾏｱかいなぁ？

やっぱり生餌の定番は金魚=餌金。毎週 1 回、餌金を喰わせることにした。色揚げには、やっぱり色物の昆虫ﾃｶﾃｶってのがいい。ｺｵﾛｷﾞどうって、ﾌﾀﾎｼ・ｺｳﾛｷﾞを仕入れた。“鈴虫の音色”なんてもんじゃない、はるかにｳﾙｻｲ大合唱に、“うるさ～い”って却下。鳴き声の小さいﾖｰﾛｯﾊﾟ・ｲｴ・ｺｳﾛｷﾞはどう?、確かに静かだけど、夜通しｶﾞｻｺﾞｿｶﾞｻｺﾞｿとｱﾌﾞﾗﾑｼの騒音。ﾑｶﾃﾞはどうって、立派な無傷の冷凍ﾑｶﾃﾞのﾊﾟｯｹｰｼﾞはｲﾝﾄﾞﾈｼｱ産。あれぇこれ喰わんでぇ、ｱﾛﾁもｹﾞﾃ物苦手なんじゃない。



ｻﾞﾘｶﾞﾆもいいらしい。ふるさとの川に網を持って出かけてみても、このごろはおいそれとは捕まらない。小鮒どころかめだかｶﾀﾞﾔｼさえも網にかからない。ｽﾄｯｸの簡単なｱﾌﾘｶ・ﾂﾒｶﾞｴﾙはどうって、逃げ回ってｱﾛﾜﾅが餌にありつくのにひと苦労。

子飼いのｱﾛﾜﾅだけれども、一匹奇形が紛れていた。上顎が未発達で、下顎が少しめくれて、兎唇・ﾐﾂｸﾁって感じの過背金龍。ものはいいし、背中にも金ぴかがそろそろでてきそうだけど、口が開いた状態の“みにくい・醜いｱﾛﾜﾅの子”。見る人みなさん、これこれどうしたん、大丈夫？って心配してくれる。思い余ってｼｮｯﾌﾟに下取りに出した。ｼｮｯﾌﾟで

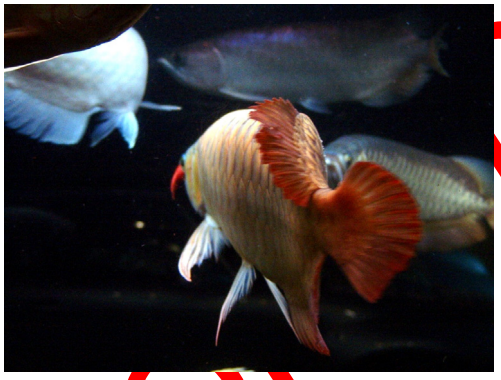
CONFIDENTIAL

は“おちょぼ口くん”の愛称で人気者になった。

しかるに、ﾌｨｼｭﾏｶﾞｼﾞﾝのｱﾛﾜﾅ特集。東京千代田区の逓信総合博物館で行なわれた夏のｱﾛﾜﾅ・ﾎﾋﾞｰ・ｲﾍﾞﾝﾄでの“日本一のｱｼﾞｱｱﾛﾜﾅ・ｺﾝﾃｽﾄ”の報告（佐々木浩之、鈴木仁：大ｼﾞｬﾝｸﾞﾙ展ﾚﾎﾟｰﾄ、Fish Magazine Vol. 498 (9): 63-70, 2007）。そのなかで、水族館でも見ることができない“怪魚十珍”のｺｰﾅｰに、なんとそっくりさんの紅尾金龍の写真が載っているではないか。

なんでも世界のｱﾛﾜﾅ 10 大珍魚に数えられる代物。口が開いた状態は“いつでも福来る大変縁起のよい魚”として香港あたりでは“ふくちゃん”として大人気なんだって。購入・輸入元の R 社に尋ねると、10 万匹に 1 匹出るか出ないかの貴重品ですよ、よかったですねぇって。過背金龍の福ちゃんなんて“ｱﾛﾁの福の神”、探してもみつからないよ。こりゃこりゃ大～変だぁ、ってなわけで、さっそくに取り戻してきた。

水槽を 1/f=ゆらぎのﾘｽﾞﾑで優雅に周遊するｱﾛﾜﾅたちを眺める。照明の色具合で、泳ぐ場所によって微妙に鱗のﾃｶﾘが変化する。ﾎｯﾄする癒しのひと時である。こいつらとは、これからあと 20 年ものお付き合いとなる。ぼちぼち本当の赤黒い紅色や金ぴかの金色もでてくるのかな？ほのかな期待を抱く。



ｱﾛﾜﾅ混泳はﾀﾞｲﾅﾐｯｸで見栄えがいいけれど、ｱﾛﾜﾅの本能は、縄張り争いをする獰猛な魚。小競り合いはしょっちゅうで、噛みつきの本戦も時には起こる。そのため、どうしても尾鰭がばらけたり、胸鰭が欠けたり、なかには鼻ﾀﾞﾝｺﾞや口髭欠落事故も発生する。そこはそれでぐっとぐぐっとぉ、がまん、う～んがまんじゃ。ｱﾛﾜﾅの持つ自然の純朴さに癒され、ｼｮﾊﾞを守る心意気に男心をほだされ、われ先にと競って餌を食む迫力に元気を頂戴する毎日である。

CONFIDENTIAL!